

とを示唆する。素朴な知は洗練された教義や思索とは無縁だが、あたかもワクチンのように人生の悲惨を受容する免疫として作用してきたと言える。

近代以後、世俗化や宗教離れが指摘され、世界各地の宗教共同体も産業、生産様式の変化に伴い、家族や地域共同体も変容し、経済や医学の発展により人々は飢餓など生命の危機に鈍感になった。宗教の素朴な知にも危機がないとは言えないが、なお多くの宗教が現在まで存続している。素朴な宗教知は洗練された宗教思想や宗教体験と矛盾するようだが、それを準備する基盤でもある。現代の宗教を考えるためにも、素朴な宗教性の哲学的考察が必要である。

祈りにおける「かたどりと「ちから」

——レーウの宗教論から——

木村 敏 明

祈りを具体的なコンテキストに埋め込まれた社会的実践として考察した場合、そのような祈りを構成するさまざまなレベルでの「かた」あるいは「かたち」が果たす役割を考慮する必要がある。つまり祈りを身につけるといことは語彙やリズムを含めたこのような「かた」を適切に用い、それを駆使して日常生活における諸経験、苦しみ悩みなどに「かたどりと」をしていくことではないか。もちろんこのことが祈りという現象のすべ

てを汲みつくすというわけではないが、社会的実践としての祈りを考察する有効な視点となりうるのではなからうか。

本発表では、祈りにおける「かたち」、あるいは「かたどりと」としての祈りについて考察する糸口として、オランダの宗教現象学者、G・ファン・デル・レーウの宗教論をとりあげる。レーウは、従来オットーやハイラーのドイツ宗教学の流れの中におかれ「宗教経験」派の一人という扱いをされてきた。確かに、レーウが宗教の本質を「ちから」の経験にみていたことは疑問の余地がない。しかし一般に理解されているのとは少し異なっており、彼は宗教における「かたち」の問題に終世こだわった。『道と境界』（一九三二年）に代表される彼の芸術論は、芸術と宗教の関係を論じたものであるが、それはまさに「経験」と「かたち」の関係を軸とするものである。一年後に出版された『宗教現象学』（一九三三年）が「経験」に軸足をおいた人類の宗教史の試みであったとすれば、『道と境界』は「かたち」に軸足を置いた同様の試みであるといってもよいだろう。

ハイラーの祈り論において形式性の問題がもたらした内的な経験あるいは感情を硬直させる「化石化、機械化」を招くものとしてネガティブに、せいぜい必要悪としてとらえられているのに対し、レーウは祈りの持つ違った側面に光をあてる。レーウに言わせれば、祈りが生き生きとした「ちから」をもつのは、それが固定され、反復される「聖なる言葉」という側面を保持しているからだという。その意味でレーウは祈りの形式性を墮落や必要悪ではなく、祈りにとって本質的な要素であると見るのである。このような「かたち」と「経験」の関係は祈り論だ

第1部会

けに限られないレーウの宗教論全体の特徴である。「かたどることと経験することは分離されることがない。かたどることは経験の封を開き、それを可能にし、それを伝え、それを高揚させるのである。かたちと経験を分離することは双方を破壊することである」とレーウは述べている。

これらをふまえた上で「聖なる言葉」論へ視線をもどすと、「ちから」を呼び覚ます「聖なる言葉」は自由な散文的形式というよりむしろ「決まり文句」であるという。字句や響き、リズムにおいて規定されたフレーズに組み合わされるとき、言葉はその力をもっとも発揮する。現代人が古い「決まり文句」を軽蔑するのは、逆にその力を恐れているからだ、とレーウは論じる。なかでも、レーウが重視するのはその「リズム」である。リズムを秩序だて整えることを通して「ちから」は集中され、制限され、固定化され、高められる。また逆にリズムを弛緩させることによって「ちから」は切り捨てられる。このようにレーウにあつては「かたどり」はリズムを介して「ちから」を統御する技術であるともいえ、言葉を用いてなされる「かたどり」としての祈りにあつても同様のことがいえるのである。

本発表ではレーウの祈り論を、彼の祭儀論にかなり引き寄せて論じてきたため、祈りという実践の独自性に関するレーウの議論をかなり捨象してしまったさらいがある。しかし、ここで論じたような視点は、どうしても言葉の意味やそこに表明された思想の研究に偏りがちな祈り研究に新たな示唆を与えてくれるものであると考える。

G・サンタヤーナにおける自然主義と宗教

庄司 一平

ジョージ・サンタヤーナの「自然主義」の立場は、少なくともその宗教論においては、あらゆる現象を「自然」と「超自然」に二分する還元主義ではなく、自然的物理的な説明も精神的道徳的な説明もあり得るとする非還元的な両立論をとっているように思われる。たしかに、人間は、その「動物的」（自然的）な生活において、外界の事物の存在や事物との行為的かわりなどを素朴に信じており（「動物的信」に基づく實在論）、このプラグマティックな態度こそが自然主義の基礎である。しかし、サンタヤーナによれば、芸術や宗教の空想的世界と日常の自然的世界とは別のものだという。

サンタヤーナにおける宗教の本質論によれば、神話や宗教的な表象・象徴は、詩的な想像力が人間の熱望や欲求を反映させて「自然に」創り上げられた、いわば象徴体系として機能する。それら象徴化された人物や神々はリアリティをもって人々の前に現われる。さらに、宗教と詩はともに人間の理想や期待の表現形式である点で、本質的に同一である。宗教と詩は、ただ生の実践に対する関与の有無によって区別される。すなわち、それが生の只中に深く関わってくる場合には「宗教」と呼ばれ、生に対して何の実践的影響ももたらさない場合には「詩」と呼ばれる。すべての宗教において、生の条件や目的は